



私の看護エピソード

〈埼玉県〉 丸山勝也 まるやま かつや 77歳

定年退職を、2年後に控えた寒い冬の朝。体が異様にグラグラと激しく振れました。急ぎよ、大病院に駆け込みました。検査の結果、悪性の脳腫瘍だったため、直ちに開頭手術を余儀なくされました。

不運にも脳幹付近に腫瘍が一部残ったのです。手術後は言語障害で、3カ月以上の苦しい車いす生活でした。

意思疎通は文字盤に頼った記憶があります。歩行器につかまって歩けるようになり、ナースステーションの前を通過しました。

すると、大勢の看護師さんたちがナースステーションから飛び出て、廊下に並んで「がんばれ！がんばれ！」の大声援です。歩けるように

なった喜び、うれしい声援が脳裏で交錯しました。オイオイと号泣しながら、歩いた記憶が深く刻み込まれています。涙の海中にいるような不思議な形相だったでしょう。

ある医学書をひもときますと、特に怖いのは神経膠腫ちうじゆ（グリオーマ）で超・悪性のがんだ、と記されていました。

そこで執刀医に「私の腫瘍は、神経膠腫ですか？」と恐る恐る尋ねたのです。答えは「YES」で、完全消滅の保証なしとの悲しい宣告でした。抗がん剤の点滴中に「俺はもう駄目だ」と、私は号泣をしてしまったのです。

処置中の看護師さんは、私の手を

優しく握りながら「今は泣くだけ泣き、吹っ切れたらがんと闘いなさい」と、言いました。

柔らかな白い手が、私の脳裏に鮮明に刻み込まれています。

手術後、十数余年の歳月が流れました。幸いにも現在、異常の兆候はありません。この「がん戦争」、私の勝ちでしょう。

当時の看護師さんにお会いして「再発はありません」と、言いたい気持ちが入り込んでいます。

